

# Journal of ISOM Japan

国際東洋医学会日本支部会誌

## ご挨拶

国際東洋医学会会長 元雄 良治

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

国際東洋医学会 (International Society of Oriental Medicine : ISOM) は、原則として2年ごとに学術大会 (International Congress of Oriental Medicine : ICOM) を開催してまいりました。去る2025年8月30日・31日に、第21回ICOMが台湾・台北において開催され、総参加者数は約1,200名を数え、内訳は台湾約850名、韓国約130名、日本約50名などでありました。



2025年はISOM設立50周年にあたる記念すべき年であり、台湾でのICOM開催にあわせて50周年記念誌が刊行されました。世界最古の伝統医学に関する国際学会としての歴史と意義をあらためて認識するとともに、これまでISOMの発展に多大なご尽力を賜りました先人の皆様に、深甚なる敬意と感謝の意を表します。

来る2027年6月には、第22回ICOMが日本において、名古屋国際会議場を会場として開催され、第77回日本東洋医学会学術総会と同時開催となる予定です。本大会では、日本全国からの参加者に加え、海外からの多数の参加者が見込まれており、日本東洋医学会学術総会における演題名は英語併記となる予定です。本合同大会は、海外からICOMに参加される方々に日本東洋医学会 (JSOM) の活動を広く知っていただくとともに、JSOM会員の皆様にISOMおよびICOMへの理解を一層深めていただく、極めて意義深い機会になるものと考えております。

なお、ISOM日本支部は会費収入により運営されております。今後とも安定した学会運営のため、会員各位におかれましては、会費の確実なご納入につきまして、何卒ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

## ICOM21stにおけるISOM設立50周年記念式典の報告

関西医療大学 深澤洋滋

2025年8月30日から31日にかけて、第21回国際東洋医学会学術大会 (International Congress of Oriental Medicine : ICOM21st) が、台北市の国立台湾大学病院国際会議場において開催された。本大会には、世界14か国から1,000名を超える研究者・臨床家が参加し、東洋医学の科学的発展および統合医療としての可能性について活発な議論が行われた。会期中には、国際東洋医学会 (International Society of Oriental Medicine : ISOM) 設立50周年記念式典が開催され、本報告ではその概要を中心に報告する。

ISOMは、第4回国際鍼灸会議 (1975年、ラスベガス) に参加した韓国人有志により、同年、韓国・ソウルにおいて設立された国際学会である。現在は、韓国、日本、台湾、オーストラリア、ギリシャ、香港などから選出された理事によって構成され、東洋医学の国際的発展に寄与してきた。伝統医学分野における国際学会と

しては、国際アジア伝統医学大会（ICTAM）、ASEAN 中医薬学術大会、世界鍼灸学会連合会（WFAS）などが長年にわたり活動を続けているが、ISOM はこれらの中でも最も長い歴史を有する国際学会であり、設立 50 周年を迎えた意義は極めて大きい。

ICOM21st の会期中には、ISOM 設立 50 周年を祝う多彩な記念行事が随所に企画された。学会会場内には、ISOM の歩みを紹介する展示スペースが設けられ、来場者が同学会の歴史および国際的活動の軌跡に触れられる構成となっていた。また、学術大会前夜および開催当日には、記念バンケットをはじめとする祝賀行事が催され、設立 50 周年の節目にふさわしい祝賀ムードが醸成された。これら一連の記念行事の中でも、最も象徴的な出来事は、頼清徳台湾総統を迎えて行われた開会式における「台湾宣言」の発出であった。厳重な警備体制のもと、50 名を超える報道関係者が集まる中で発出された本宣言は、東洋医学の国際的プレゼンスを強く印象づけるものであり、国家として東洋医学の推進に注力する台湾の姿勢を国内外に示す機会となった。

「台湾宣言」は、「これまでの 50 年と、さらなる 50 年」を理念として策定されたものであり、東洋医学が長い歴史と豊富な臨床的実績を基盤として、人類の健康と福祉に貢献してきたことを改めて確認している。さらに、COVID-19 をはじめとする世界的な保健危機において、感染症対策、回復期管理、メンタルヘルス支援など、多面的な役割を果たしてきた点を評価し、東洋医学を現代の公衆衛生体系における重要な医療資源として位置づけている。加えて、各国政府および国際機関に対し、研究および政策面での継続的な支援強化を求めるとともに、現代医療機器の活用や AI・ビッグデータなどの先端技術との融合を推進し、将来の保健危機に備えた国際協力体制の強化を通じて、東洋医学の国際的地位確立を目指すことが明示された。

ISOM 設立 50 周年を迎えた ICOM21st は、東洋医学がこれまでに積み重ねてきた歴史と成果を振り返ると同時に、今後の国際的発展の方向性を明確に示す重要な学術大会であった。とりわけ、「台湾宣言」の発出は、東洋医学を現代の公衆衛生体系における重要な医療資源として再定義し、科学技術との融合および国際協力を通じた将来像を世界に向けて発信するものであり、その意義は極めて大きい。次回 ICOM22nd が、2027 年に名古屋で開催される第 77 回日本東洋医学会学術大会に合わせて実施されることは、設立 50 周年という節目を越え、ISOM が次の 50 年に向けて国や地域を超えた協力体制をさらに深化させるとともに、日本がその一翼を担い、東洋医学の国際的発展および公衆衛生への貢献に寄与していくことが強く期待される。



## The 21<sup>st</sup> ICOM 体験記

千葉大学墨田漢方研究所 森田智

The 21st ICOM は、台大醫院國際會議中心にて 2025 年 8 月末に開催されました。本学会における私の演題は "Continuous acupuncture treatment at the LI20 acupoint promotes recovery of olfactory dysfunction after COVID-19" であり、ポスター発表として採択されました。当日、会場に足を運ぶと、日本を含む東アジアの国・地域を中心に、さまざまな国・地域から多くの参加者が集まり、会場各所で大変活発な議論が交わされていました。ポスター発表は約 100 演題が掲示され、そのうち 6 演題が Outstanding Poster Oral Presentation に選出されました。選出された各国 6 名による口頭発表が行われ、日本からは広島大学病院の廣瀬桂子先生と

私が登壇しました。近年は、ISO/TC249 国際標準化会議における発表の機会はありませんでしたが、臨床研究に関する国際学会での発表は、2018年の The 19th ICOM 以来となりました。そのため、どこか落ち着かない緊張感を抱えつつも、皆様に見守られながら発表および質疑応答を無事に終えることができました。

発表を終え、緊張から解放され安堵していたところ、主催者より、私の演題が Outstanding Poster Award 1st Prize に選出されたとの連絡を受けました。このような荣誉ある賞を頂戴し、強く感じたのは、決して私一人の力で成し得た成果ではないということです。研究を共に進めてくださった共著者の先生方、そして多方面から支えてくださった皆様の存在があってこそ、ここに至ることができました。これまでの一つ一つの過程を振り返る中で、そのご支援の大きさと温かさを改めて実感しています。

本学会の開会式には頼清徳総統が臨席され、台湾における伝統医学が社会的に高い評価と確固たる地位を有していることを、改めて認識しました。また、Welcome Dinner や Gala Dinner では、大音量のマイクとともに華やかなショーが繰り広げられ、国際学会ならではのスケール感と熱気を肌で感じる貴重な体験となりました。こうした交流の場が、学術面にとどまらない国際的なつながりへと発展していく重要性についても学ぶことができました。

2年後には、名古屋にて The 22nd ICOM が開催される予定です。今回は、参加者としてだけでなく、何らかの形で学会の運営や発展にも貢献できればと考えています。

## The 21<sup>st</sup> ICOM 体験記

栄漢方内科クリニック 大熊康裕

2025年8月、第21回 ICOM に参加するため、台北を訪れました。初日は、西原啓史様（台湾順天堂日本支部支店長）のご紹介により、台湾料理店「梅子」にて、田原英一先生（日本東洋医学会会長）をはじめ、畝田一司先生、深澤洋滋先生、松浦悠人先生と夕食をご一緒する機会を頂き、有意義な時間を過ごしながらか初日を終えることができました。

2日目は、牧野利明先生、山岡傳一郎先生、吉富誠先生方とともに、台北市内の漢方薬局を見学しました。台湾における中医学の実臨床や生薬流通の一端に触れた後、学会会場である台大醫院国際會議中心へ移動しました。ウェルカムパーティーでは、台湾の懇親会の通例であるカラオケが行われ、日本チームでテレサ・テンの「我只在乎你（時の流れに身をまかせ）」を披露しました。ちょうどお隣の席が、昼間の漢方薬局見学をご一緒した王静瓊先生（臺北醫學大學教授）であったこともあり、和やかな雰囲気の中で各国の先生方との親睦を深めることができました。

3日目の開会式には、台湾総統の頼清徳先生がご出席され、祝辞を述べられました。日本以外の地域では、これほどまでに伝統医学が社会的に重視されていることを実感し、大変印象深く感じました。会場は中文会場および英文会場（日本・韓国チームは別室）に分かれて進行され、ポスターセッションも終始活発に行われていました。

今回の学会参加で最も印象に残ったのは、普段日本ではなかなかお会いする機会のないレジェンドの先生方から若手のホープの先生方まで、親しくお話しすることができた点です。また、懇親会場において、国際東洋医学会会長に就任された元雄良治先生が、「旗が重い！」と



一言添えながら学会旗を振られていたお姿は、本学会の重要性と重責を象徴する光景として、強く心に残りました。

2027年には、名古屋において合同大会の開催が予定されています。ぜひ多くの先生方にご出席いただければ幸いです。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

## The 21<sup>st</sup> ICOM 体験記

広島大学病院 廣瀬桂子

2025年8月30日および31日に開催されたICOM2025に参加し、「Relationship Between Mental Fatigue and Kampo Medical Diagnostic Findings Including Tongue Examination」について発表を行いました。本演題は当初ポスター発表として採択されましたが、その後 Outstanding Poster Oral Presentation に選出され、口頭発表の機会も得ることができました。

国際学会で個人として発表するのは今回が初めてでしたが、非常に刺激的で、学びの多い時間となりました。限られた発表時間の中で、研究内容をどう伝えるか、構成や時間配分の重要性を改めて実感しました。

学会期間中は多くの先生方の発表を聴講し、国際学会ならではの研究の見せ方やプレゼンテーションの工夫など、参考になる点がたくさんありました。特に Outstanding Poster Oral Presentation に選出された先生方の発表は、内容が分かりやすく、表現も工夫されており、今後の発表に向けて大きな刺激を受けました。

また、小川恵子教授をはじめ諸先生方のご指導のもと、本研究の要点を国際的な場で発信できたことは、個人としても大変貴重な経験となりました。

学会の合間には、参加した先生方とともに台北最古の寺院である龍山寺を訪れたり、夜市で台湾ならではの食文化を楽しんだり、現地の歴史や暮らしに触れる機会もありました。ガラディナーでは浴衣を着用して参加し、各国の参加者と写真撮影や交流を行うなど、学会ならではの国際交流も印象に残っています。

今回の経験を今後の研究や発表に活かしながら、広島大学漢方診療センターにおける診療・研究の取り組みを、引き続き国際的に発信していきたいと考えています。



## 世界に私を導いてくれた第6回ICOMにおける顔焜熒教授との運命的出会い A fateful chain of events brought me here

松山記念病院 山岡傳一郎

2002年、高松市で開催された第10回日本総合診療医学会。その折、私は初めて日野原重明先生を間近に拝する機会を得た。懇親会の席で、先生が若い医師たちに静かに、しかし力強く語っておられる言葉を、私は少し離れた場所から聞いていた。

「国際学会に出席する意義は、演題発表だけではありません。学会後に、これまで著書でしか知らなかった著名な先生に声をかけ、自分を印象づけることが大切なのです。意外なことに、その先生は、有名な研究者同

士の会話よりも、あなた方のような若い医師との会話をよく覚えているものです。さらに、学会後に手紙を出せば、返事が届き、それが留学や新たな道につながることもあるのですよ。」

この言葉は、不思議なほど鮮明に、私の脳裏に刻み込まれた。

国際東洋医学会 (ICOM) は、1975年に設立された、最も長い歴史を持つ東洋医学の国際学会である。その第6回大会が、「自然科学と伝統」をテーマに、東京・国立教育会館で開催された。私は、東洋医学の師である光藤英彦先生のご指導のもと、初めて英語によるポスターセッションに参加した。当時、ポスターを完成させるだけで精一杯で、会場に掲示した瞬間、「これで私の国際学会は終わった」と安堵したのを覚えている。



Praying my respects at the grave of Professor Yen Kun-Ying on the day before the 21st ICOM in Taipei.

その時である。

一人の細身の紳士が、私のポスターの前に立ち止まった。顔焜熒教授であった。

私は、光藤先生と共に取り組んでいた「時系列分析法 (Chronological Analysis)」について、いわば“Japonglish”とも言える拙い英語で必死に説明した。教授は一度その場を離れられたが、ほどなくして戻ってこられ、今度は驚くほど流暢な日本語で話しかけてくださったのである。

この出会いが、その後の私の人生を静かに、しかし確実に導いてくれたことは疑いない。

台北医学院教授であった顔焜熒先生の著書、『図解常用漢方処方』と『原色漢薬と飲片図鑑』は、今なお私の座右の書である。先生は後年、私の勤務する松山市にもお越しになり、その際に頂いた直筆サイン入りの書籍は、今も大切に手元に置いている。

その後も私はICOMへの参加を重ねてきた。特に印象深いのは、沖縄で開催された第18回大会である。顔先生は、なぜか私を、国際的に著名な諸先生へ次々と紹介してくださった。そのご縁は連なり、いつの間にか、ICOMのみならず、ISJKM (国際日本漢方シンポジウム) をはじめ、世界各地に友人と呼べる人々が広がっていった。

2025年8月30日から31日に台北市で開催された第21回ICOMでは、

*Lessons Learned from the Great Professor Yen Kun-Ying*

という題で発表する機会を頂いた。その前日、私は顔焜熒先生の眠る墓所を訪ね、静かに手を合わせた。

## 第 22 回国際東洋医学会学術大会 (ICOM2027) 開催予告

ICOM2027 を、第 77 回日本東洋医学会学術総会と合同開催として、2027 年 6 月 4~6 日 (金~日) に、名古屋国際会議場 (名古屋市熱田区) を会場として開催する予定です。ICOM を日本東洋医学会学術総会と合同開催するのは、1999 年の第 10 回 ICOM 以来、2 回目の試みです。ICOM2027 は、6 月 4 日にメイン会場、ポスター会場の 2 会場で行い、その他、5~6 日に行われる国際関係のイベントを日本東洋医学会国際委員会と共催します。学会のテーマも、日本東洋医学会と合わせて Passion for Oriental Medicine: Inspiring the Next Generation (次世代に繋ぐ漢方愛) とし、会頭講演、シンポジウム等を企画していきます。ISOM 日本支部 Web

ページ (<https://plaza.umin.ac.jp/~ISOMjpn/>) に、準備状況を随時更新していきますので、ご確認をお願いいたします。会員の先生方からの一般演題としての発表、皆様のご参加を心よりお待ちしております。

## 2026 年度国際東洋医学会 (ISOM) 日本支部理事一覧

2026 年 1 月 12 日に日本支部理事会を開催し、2026 年 1 月からの理事を以下の先生方にお務めいただくことに決定いたしましたので、会員の皆様にご報告申し上げます。任期は 2027 年 12 月までです。

敬称略，五十音順

1. 小川 恵子 (広島大学病院漢方診療センター) : ニュースレター担当
  2. 尾崎 和成 (市立伊丹病院老年内科)
  3. 貝沼 茂三郎 (富山大学医学部和漢診療学) : ISOM 理事
  4. 加島 雅之 (熊本赤十字病院内科)
  5. 高山 真 (東北大学病院漢方内科、日本東洋医学会副会長) : ISOM 副理事長、日本支部長
  6. 田原 英一 (福島県立医科大学、日本東洋医学会会長)
  7. 友利 寛文 (那覇市民病院外科)
  8. 永田 豊 (諏訪中央病院東洋医学科)
  9. 並木 隆雄 (国際医療福祉大学成田病院)
  10. 野上 達也 (東海大学医学部漢方医学)
  11. 笛木 司 (マツヤ薬局、東邦大学医学部)
  12. 福間 裕二 (日高病院泌尿器科)
  13. 牧野 利明 (名古屋市立大学大学院薬学研究科) : ISOM 副事務長・日本支部事務局長
  14. 松浦 悠人 (有明医療大学保健医療学部鍼灸学科)
  15. 宮崎 瑞明 (塩浜宮崎医院) : ISOM 理事 (台湾担当)
  16. 室賀 一宏 (オペラシテイクリニック)
  17. 元雄 良治 (福井県済生会病院) : ISOM 理事長 (会長)
  18. 山岡 傳一郎 (松山記念病院) : ISOM 理事
  19. 吉富 誠 (梶原町立国保梶原病院) : ISOM 理事 (韓国担当)
  20. 和辻 直 (明治国際医療大学) : ISOM 理事 (鍼灸担当)
- 監事 津谷 喜一郎 (公益財団法人生存科学研究所)  
永井 良樹 (順天堂大学大学院漢方先端臨床医学)

日本支部の益々の発展のために理事一同献身して参りますので、会員の皆様におかれましては今後ともご指導、ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

Journal of ISOM Japan 2026 No. 1

発行日：2026 年 1 月 13 日

編集者：河原章浩、小川恵子

発行者：国際東洋医学会日本支部  
(ISOM Japan)

**国際東洋医学会日本支部**

**ISOM Japan**

名古屋市瑞穂区田辺通 3 - 1

名古屋市立大学薬学部生薬学分野内

TEL&FAX 052-836-3416

E-mail: [isomjapan@gmail.com](mailto:isomjapan@gmail.com)

ウェブサイト <http://isomjpn.umin.jp/>